The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上級日本語アカデミック・ライティング授業の実践報告 : 文章の比較・分析・評価タスクによる教材を用いて
Author(s)	村岡, 貴子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2014, 18, p. 99-112
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50836
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第18号（2014）

上級日本語アカデミック・ライティング授業の実践報告
― 文章の比較・分析・評価タスクによる教材を用いて ―

村岡　貴子*

要　旨

本稿は、筆者が共同執筆により開発・出版したアカデミック・ライティングに関する教材を用いて、2013年度春学期の「留学生日本語プログラム選択コース」およびリーディング大学院「超域イノベーション」の言語トレーニング科目である「超域アカデミックライティング」で行った授業実践について報告するものである。上記の教材の目的と特徴、上級とする日本語レベル、および授業概要について説明した後、出席率が90%以上で全課題を提出し、協力が得られた受講者に対する調査の結果をもとに、教材と授業実践に対する評価と課題について考察する。

【キーワード】アカデミック・ライティング、協働的タスク、文章の比較・分析・評価、論文スキーマ

1　はじめに

本稿では、筆者が共同執筆により開発・出版した教材『論文作成のための文章力向上プログラムーアカデミック・ライティングの核心をつかむー』（村岡・因・仁科 2013a, 大阪大学出版会）を用いて、国際教育交流センターによる「留学生日本語プログラム選択コース」上級レベルの「アカデミック・ライティング500/600」および相互乗り入れで開講したリーディング大学院「超域イノベーション」の言語トレーニング科目「超域アカデミックライティング)」において2013年春学期に行った授業実践について報告する。その上で、受講者に対する調査の結果を分析し、教材と授業実践への評価と課題について考察を行う。

次章以降では、まず、上記教材の目的と概要について述べる。次に、今後の授業の指針とするために、同教材を用いた授業の受講者に対して教材内容と学習活動に関する調査を行った。受講者への調査は、学期末に行った受講者への簡単なアンケート、およびアンケートの結果をもとに、出席率が90%以上で全課題を提出した受講者（以下、学習者）の中から、協力が得られた3名に対して個別に行ったインタビュー調査である。

今回は、学習者数が多数ではないため、量的ではなく、質的な調査として位置付け、当該学習者が、本授業の継続的な受講と課題への取り組みを通して気づいたライティング学習への意識の変容や、自身のライティング能力の変化等について語った内省やコメントを、同教材と授業へのフィードバックのデータとして分析する。その上で、今後の課題についても言及する。

2　授業で使用した教材の概要

第2章では、授業で用いた教材の概要を示す。まず、教材開発の背景、目的、および特徴について、筆者の過去の関連研究も引用しながら説明する。

2-1　教材の目的と背景

本教材の対象は、「これから日本の大学や大学院、学会などの研究コミュニティに参入し、文字言語としての日本語を活用してアカデミックなコミュニケーショ

* 大阪大学国際教育交流センター教授

ンを行う必要がある人々」（村岡・因・仁科 2013a, p.5）である。本教材の目的は、「そのような学生や研究者の卵である人たちの、文章を作成する能力の向上を支援する」ことである（同上, p.5）。換言すれば、本教材は、研究コミュニティへの新規参入者が、文章ジャンルの差異を意識し、文章の目的・読み手・媒体を考慮して、内容・構成・表現の選択が行えるようになること、すなわち、研究活動に必須のメタ認知的な視点を内在化し、その視点からの判断により、文章作成能力を向上させることを目的としている（村岡他 2013a, p.20）。

このような目的を設定した背景には、従来型の、言わばモデル提示型教材で多くの表現や文型、構成のパターンを示すタイプのみでは、ライティング能力の向上が困難なケースが多々見られる（因他 2008；村岡他 2009）という現状がある。そこで、新たなライティング学習方法の開発のため、筆者は、本稿で扱う教材の共著者とともに、学習者の習得過程や彼らの学習に対する意識を探り、特に学習成功者への調査研究を行ってきた。その結果、学習成功者は、言語項目の知識の多寡にかかわらず、文章の目的や全体の構成を見る目を持ち、かつ、日本語によるライティング学習を研究活動と結びつけて位置付ける広い視野を有することが明らかとなった。そのような成功者を、研究や論文とは何かの概念に関する総体的な知識を有する、すなわち「論文スキーマを有する」者と呼ぶこととする（村岡他 2010；村岡 2011；村岡 2012；村岡他 2012；村岡 2013）。

一般に、論文の書き方、あるいはレポートの書き方を教授する教材や入門書は多々あるが、本教材がそれらと差別化される特徴的な点は、上記のような知見をもとにしたことであり、次にさらに具体的に示す。

2-2　教材の構成と特徴

本教材は次の全 10 章から構成される（村岡他 2013, pp.3-4）。

1　「書く主体」である自分とは
2　学習・研究のための「書く」活動について知る
3　学習を自己管理し、学習方法を探索する
4　文章を読んで問題点を探す
5　文章の目的から構成を考える
6　論理の一貫性を考える
7　的確な表現を追求する
8　研究内容を報告する
9　活動報告を書く
10　未知の人やコミュニティに「自分」を説明する

この中で、前半の 1 - 3 章は、後に 6.2.2 で言及するように、ライティング学習の方法等をふり返る「内省」タスクを中心としたもので、第 4 章以降は文章の比較・分析・評価のタスクを豊富に盛り込み、後半はそれらに加えて「リバイズ」や「執筆」のタスクも配置している。一部の具体例を、本報告の巻末に資料１－４として添付した。

このような構成を有する本教材の特徴は、次の 3 点にまとめられる（村岡他 2013a, pp.5-6）。

(1) 学習・研究活動に対する巨視的な視点の獲得を重視する。
(2) 学習・研究活動場面で用いられる多様なジャンルの文章を用いる
(3) 自己あるいは他者との対話によって自ら向上する姿勢を強化する。

(1)は 2-1 で示したように、研究活動に必須のメタ認知的な視点を内在化するということである。つまり、文章の個々の表現や文法のみならず、論理展開や構成、あるいは自身の研究活動の中におけるライティングの意義や学習方法を巨視的に捉える視点を涵養することである。巨視的な視点による行動には、例えば、研究活動に必要な人的・物的リソース（資源）の活用、期限までの実行可能な行動計画の作成や執筆要領遵守の重要性の理解（村岡他 2013b）等も含む。

この点が本教材の最も重要な特徴であり、次の(2)と(3)は(1)を支えるためのものである。さらに説明を加える。

(2)は、2-1 で示した目的達成のため、対象とする書き手の最終目標である論文以外にも、本教材は、レ

ポート、報告書やEメールによる通信文等、研究活動を支える種々の文章を扱っていることを示している。すなわち、最終目標としては原著論文や修士論文・博士論文を作成するとしても、一般に研究活動ではそのような論文のみを作成するわけではなく、論文完成に至るまでに、研究活動を支える種々のライティング活動が必要であるという現状を反映している。上記のような種々の文章は、必要とされる文体や形式が異なっていても、適切な構成や論理展開、用語の厳密な使用等が求められる。それらの存在が読み手への配慮につながり説得力を増すことは、異なるジャンルの文章であっても、全く共通する重要事項である。

さらに、(3)にあるように、それらの文章を他者と協働して比較・分析・評価するタスク活動と執筆練習活動、および各タスクに関する解答例を含めた解説書である別冊を提供しており、他者から学ぶ姿勢の強化を図っている。他者から学ぶ姿勢は、研究活動や論文作成では当然のことであり、他者の先行研究を、敬意を払いつつ批判的に読み、かつ、自身も他者からの批判を受け、より質の高い成果物の完成に向けて努力するための必須の条件である。

3　上級日本語レベル

第3章では、本稿で報告する授業の上級日本語レベルについて、先行研究を引用しながら記述を行う。

国際教育交流センターで開講している「留学生日本語プログラム選択コース」では、日本語のレベルを6段階に分け、100（入門）、200（初級）、300（中級前半）、400（中級後半）、500（上級）、600（超上級）まで設定している。

本稿で扱う授業の500/600レベルは、上級・超上級に相当するものであり、授業はレベル合同で実施している。西口（2012）および村岡（2013）は、このうちの500レベルが、Council of Europe（2001）によるCEFR（Common European Framework of Reference for Languages）の「C1」に相当するレベルとしている。その中で、村岡（2013）は、アカデミック・ライティングの能力について、対象となる大学院レベルの研究留学生の特性と研究上のライティングの必要性に鑑みて、以下の資料1のように記述している。

資料1　日本語500レベルの記述

自身の専門分野のテーマや社会問題等における比較的複雑なトピックについて、適切な段落構成、適切な長さの文により、首尾一貫した論述が行える。文章中の中心文と支持文が明確で、必要に応じて引用を行いながら事例を提示しつつ、主張に対して適切な内容で適切な分量の根拠や理由を示すことができる。また、学術雑誌等の執筆要領の意義が理解でき、正確にそれを遵守できる。

500レベルの重要な点は、資料1の下線が示す通り、1）議論を要する分量の多い文章において、適切な構成によって首尾一貫した記述を行うこと、2）主張と根拠・理由を、適切な内容と分量で示すこと、3）執筆のための厳格なルールに従って、専門分野の不特定多数の読み手に対して発信する意義を理解し、執筆することの3点（村岡2013, p.57）にまとめられる。

上記の3点は、500レベルの学習項目が、文章の目的と読み手を意識しつつ、文字数の制限や書式といったルールを厳守しながら、その限定された範囲内で、最大限、書き手の主張を客観的に、かつ効果的に発信できることを目指すものである（村岡2013, p.57）。換言すれば、文章の構成に必要な文法や漢字等の言語項目の知識の多寡では測れないものであり、また、研究活動に必要なアカデミック・ライティングにとって重要な点そのものであると認められる。

さらに、本稿では、600レベルの記述を次の資料2の通り示す。これについてさらに説明を加える。

600レベルはかなり高度であり、学習者はこれらの運用が可能となるよう、それを目指してライティング学習を行う必要がある。資料2の各下線の通り、1）異なる目的や表現形式を有する文章ジャンルの違いを認識した上で、それに合わせた文章が作成できること、2）分量や形式に応じて内容を精査して表現が選択できること、3）十分な推敲能力を有し、内容・構成・表現の全ての面から修正作業を施すことができる、という3点にまとめられる。

資料2　日本語600レベルの記述

自身の専門分野における研究活動を支える各種の計画書や報告書、論文、あるいは研究活動を支えるEメール等による通信文といった、異なる目的の文章ジャンルとその構成や表現形式の違いが認識でき、それらに応じて、文章を作成することができる。また、文章の定められた分量や形式に応じて、執筆内容を精査し、簡潔かつ的確な表現を厳選して文章を完成させることができる。さらに、十分な推敲能力を有し、批判的に自身の文章を読んで、内容・構成・表現の全ての面から、修正作業を行うことができる。

この記述から明らかなように、600に達する日本語レベルを有する学習者は、単に高度な日本語運用能力を有するにとどまらず、かなり自律的な学習者であると言えるであろう。つまり、何かモデルや模範を示されるものに忠実にライティングを行うのではなく、文章の目的やジャンルの差異とその意味を理解した上で、自ら必要あるいは的確と考えられる表現や構成、内容を厳選して文章を作成し、さらに推敲も適切に行えるようになる、というレベルである。

このようなライティングとして難易度の高いレベルに達するには、繰り返して推敲を行い、他者からも批判的なコメントを何度も受けて再考し、さらに、複数回のレポートや論文の作成経験を積みながら自ら地道に学ぼうとする姿勢によって学習を継続することが重要であると言える。

4　授業実践の概要

第4章では、授業の概要として、以下に、授業の目的、授業計画、学習者情報、および成績評価について、学期当初に学習者に書面で知らせた内容を示す。

4-1　授業の目的

授業の目的は以下の資料3のように設定し、授業の初日において書面と口頭によって説明を行った。

この授業方法の重要な特徴の一つは、先述したように、単にモデルや模範となる文章を模倣するのではなく、学術的活動に必要とされる批判的な視点を育成し、

資料3　本稿で報告する授業の目的

論文やレポートといった学術的な文章の特性に習熟するため、多くの文章例を、クラスメートと協働でクリティカル（批判的）に分析しながら、文章の構成や論理展開の方法および的確な表現について学習し、推敲能力を含むアカデミック・ライティング能力を向上させること。

その視点から、文章の表現のみならず、構成や論理展開について、さらには学習方法についても学ぶことである。

このような批判的な視点が広く学術的活動において必須となる場面は多々ある。例えば、他者の作成した文章を読んで情報を正確に把握した上で必要な議論を行ったり、他者の文章における情報の質を峻別し、適切な引用手続きを踏んだ上で情報を取り込んだりする場合である。本授業では、そういった重要な視点を、文章の読解や作成の過程で培い、その結果として、自身の推敲能力をも向上させ、ライティング能力の養成を行うものである。

4-2　授業計画

国際教育交流センターが実施する「留学生日本語プログラム選択コース」における他の授業科目と同様に、本科目も、春学期と秋学期の各15週で構成される。授業は1週間に1コマ90分間実施される。2013年春学期に開講された本授業は、4月15日から7月31日までの毎週月曜日に実施された。

15週間の授業で、教材を用いてライティングについて学びつつ、同時に、授業後半の4週間においては、最終のフィードバックの機会も含めて、学習者自身がレポートを作成してフィードバックを受ける時間を十分に設定しておいた。表1は、以上のような全体の予定を大きく5種類に分類して示したものである。表1について簡単に補足説明を行う。

表1　本稿で報告する授業内容の各段階

段階	週目	授　業　内　容
1	1	オリエンテーション
2	2-3	大学院での研究生活に必要とされるリテラシーへの理解のための内省タスク活動
3	4-11	学術的な文章の読解とレポート作成のための協働的タスク活動
4	12-14	レポート作成およびフィードバックとしての協働的タスク活動
5	15	授業の総括とふり返り

初日はオリエンテーション、および60分の辞書使用可の条件での論説文の文章作成を課した[注1]。これは、学期末に自身で添削して、ライティング能力の向上した点を自己評価するための材料となる。後の学習者への調査に関する記述の際にさらに言及する。

次に、表1の2～3段階は、教材の協働的タスク活動を行うものである。本稿巻末の資料1と2は「内省」タスクであり、3と4は文章や表現を「分析」するタスクである。なお、授業は15コマのみであるため、教材の全章の全てのタスクを扱うことはできないが、今回、「内省」タスクは2.2で示した第1章から第3章まで、「分析」タスクは、第4章から第7章までの一部を用いた。

表1の第2段階における学習・研究活動のための「書く」活動に関する内省タスクでは、自身の学習経験をふり返り、他の外国語や母語による「書く」活動によってどのような方法で学んだ経験があるかをクラス内で情報や意見の交換を行った。この内省タスクは、自身の経験から、学んできた「方法」を意識させ、現在の日本語学習におけるライティング活動の方法と必要性への検討も課した。なお、表1の第4段階の前半は、各自のレポートへのフィードバックを行い、後半はその関連の問題点について、第3段階の教材にあるタスクも活用した。

4-3　学習者

履修登録をした上で当初から継続して出席していた学習者は10名であった。そのうち、学期末まで受講して、レポートのアウトラインや最終レポートの課題を全て提出できた学習者は、大学院生が1名、研究生が4名であった。中には、休まず受講していたにもかかわらず、最終レポートが提出できなかった例もあった。研究生や特別聴講学生の場合、入試と授業時期の重複や個別の事情により、時間管理の問題で受講継続が困難な例も見られた。本稿では、上記5名の中から、超上級レベルと認定でき、調査に関する協力が得られた3名の学習者に対して調査を行った。

4-4　成績評価

成績評価の方法は、授業初日のオリエンテーションにおいて授業概要とともに説明を行った。毎週の出席点が40%、授業への積極的な参加の程度が30%、および学期末のレポートが30%である。本授業では小グループでの協働的タスクを重要な学習活動と位置付け、学習者自身の発言やコメントだけでなく、他者の発言やコメントから学ぶ姿勢をも重視している背景から、出席点と授業への積極的な参加の程度も評価の重要な一部と考えた。

また、学期末のレポートは最終回に1編提出して終了するものではない。推敲と改訂を重視する本授業の主旨から、アウトラインの作成から最後の提出まで、複数回のフィードバックを受けて、より質の高いレポートを完成させるよう、改訂作業を少なくとも3回は行うようにカリキュラムを組んだ。

5　調査の概要

第5章では、4.3で示した、最後まで受講を継続できた学習者の中から、協力が得られた3名に対して実施した調査の概要を示す。その調査の結果に基づき、学習者によるライティングとその学習に関する意識の変容や、ライティング能力向上についての自己評価等に関して、分析と考察を行うこととする。

5-1　学習者への調査

5-1-1　学習者

インタビュー協力を得た3名の学習者に関する情報は以下の表2の通りである。

表2　調査協力を得た学習者の情報

学習者	専門分野	出身地域	母語背景
A	文　系	東南アジア	非漢字系
B	理　系	南　　米	非漢字系
C	理　系	東アジア	漢 字 系

表2に示した3名は全員、日本語能力が600レベルであった。話す速度に多少の差異はあっても、自身の意図することは日本語により支障なく説明できるレベルであり、インタビューも終始日本語を用いて行った。なお、A、Bは研究生で、Bはインタビュー実施時には大学院入試が終わっており、すでに進学が決まっていた。Cは大学院生であった。

3名の学習者には、教育研究のための調査である旨、また、個人情報保護についても、書面と口頭で説明を行い、了解を得た。インタビューは学習者の許可を得て録音し、後で文字起こしを行ってデータとした。

5-1-2　調査方法

全授業時間が終了した後、学習者にはアンケート調査への協力を依頼し、かつ5-1-1で示した学習者3名には、別途2013年8月あるいは9月に、学習者の都合に合わせて日程を決め、筆者の研究室でインタビュー調査を行った。調査は1名につき40分から50分程度である。インタビュー調査は、記入されたアンケート調査票の質問項目にそって、半構造化インタビューの方法を採用して行った。

なお、学習者Bは、インタビュー当日までにアンケート調査票への回答が間に合わなかったため、やむを得ず当日各質問項目について他の学習者より時間をかけて回答を求めた。アンケート調査票への事前の記入がないことから他の学習者のデータとは異なるが、実際に得られたデータは有用であると考えられたため、分析に用いることとした。

次の表3は、紙幅の都合上、アンケート調査の質問項目を箇条書きにまとめ直したものである。いずれも自由記述で回答を求めた。以下、補足説明を行う。

表3　アンケート調査の質問項目

番号	質　問　項　目
1	学期当初に作成した自身の文章を、学期末に自ら添削した感想
2	授業で用いた内省タスクを含む文章の比較・分析・評価等の協働的タスクへのコメント
3	現在の自身の日本語能力に対する自己評価 (1) 話し言葉と書き言葉の違い、文章ジャンルの違いへの意識 (2) 文章全体や段落内の構成 (3) 引用の手続き (4) 文章を推敲する能力 (5) レポートや論文で用いられる表現や文型
4	今後の研究生活における日本語学習方法やライティング学習方法に関する具体的な計画や希望

表3の番号1の質問項目は、学習者が4月の学期当初に作成した日本語の文章を自身で添削した際の感想やコメントを求めたものであり、ライティング能力が向上したと感じる理由や具体的な根拠の記述を期待した項目である。

次に、2は、各種の協働的タスクに関するもので、1) 他者との協働による学びへの評価、2) モデル文章を提示されて模倣や暗記を行う学習ではない、文章を批判的に読んで比較や分析を行う方法によるライティング学習についてのコメント、の2点に対する回答を求めた。

3は、特に授業中に扱った(1)から(5)の項目にそれぞれ分けて問うた。

最後に4は、本授業が契機となって自ら考案あるいは予定している今後の日本語学習計画やライティング学習の希望について記述を求めたものである。

第6章では、以上の結果を分析し、当該の授業と教材に対するフィードバックとしての評価について考察する。

6　結果と考察

ここでは、前章の表3の質問項目にそって、3名の学習者からの回答を、本授業の主旨に関わるもので特筆すべき点を選んでまとめる。その際に、インタビューで語られた内容を中心にまとめ、必要に応じてアンケー

トへの記述回答も補足的に加えることとする。

なお、各学習者のインタビュー時のコメントに文法的な誤用や発音等の問題があった場合、それらはインタビューの主旨とは関係しないため、修正した上で記載する。(　　) 内の記述は、インタビューから把握できた内容を補う目的での筆者の注記である。

6-2-1　自身の文章を添削した感想

まず、学習者Aは、インタビューにおいて自身の学期当初の文章を添削してみて、文章の量が少ないこと、文法や単語の知識の少なさ、および構成の問題を指摘した。これらの問題は母語であれば解決が可能である、と考えていると思われる。

> 自分の書いた文章は量が少なかったです。(中略) ちょっとびっくりしました。文章の構造も頭の中に、書きたいことをちゃんと整理できましたけど、実際に書くと、思った通りできていなかった。
>
> 単語と文法の知識が足りなかった。簡単な文法や単語だけ書きました。(中略) 文法の力は、高くなったとは言えないけど、4月の文章を見て、自分の能力が判断できました。構成は、文と文の関連性がわかりません。X語 (Aの母語) に直さないとわかりません。
>
> 一番難しいところは背景のところ。自分はどうしてこの研究をしたいのか、わかりましたけど、日本語で書いてみると、一貫性がないと思います。日本語能力がもっと高くなったら、そういうことができると思います。

学習者Aは母国で修士号を取得しており、日本では博士後期課程に進学予定である。つまり、来日前に母語による論文の執筆経験を有しているため、それと比較して日本語の場合にかなり差を感じた様子であった。文法等の言語知識やその運用にまだ不安を感じている一方で、「日本語で書いてみると一貫性がない」と論理構成の問題に対する自己評価についてコメントしていた。アンケートにおいても、「短い文が多く」、「接続詞があまり使われていない」こと、また「全体構成が悪く」、「3つの原因が一つの段落に入れられていて読みにくい」といった、具体的な分析に基づいて批判的なコメントがあった。このように学習者Aは、自分自身の文章に対して分析的、かつ、謙虚に内省を行っていることが明らかであった。

次に、学習者Bは、自身の作成した文章において、言語表現や文章量といった視覚的に把握しやすいものではなく、文章に現れた執筆者の背景という、巨視的な分析視点を示している。インタビューの冒頭から次の通り、自身のコメントとしての結論を、抽象的な表現によって簡潔に提示した。

> 自分の言語の背景が重要だということがわかりました。(このインタビューの) 1か月前に研究活動の中でY語 (Bの母語) の書き方を向上させるため、複雑な説明の文章を書いています。そんなふうにY語でも正確に書けるようになったら、日本語でも書けるようになると思います。Y語で不正確であれば、日本語に翻訳できないので困ることもあります。
>
> (中略) ちゃんと自分の母語が使える人が外国語を覚えるともっと早くなると思います。
>
> また、それはある程度正しいと思いますが、ときどき日本語の書き方、話し方の中で、Y語に翻訳できないことがあることも意識することが大切だと思います。おもしろいことに、勉強する前に考えていなかったこともありました。全然違う言語だと思っていました。つまり、Y語と日本語の関係はないと思っていましたが、何か伝えたいと思ったことは、同じような概念で説明することがあります。文法は一番違うものだと思います。英語とY語の文法は似ていますので、あまり英語のことはわからなくても、だいたいできることがあります。Y語から英語に翻訳する場合のように、日本語はそのようなことができない。センテンスを全部聞かないと。

上記のコメントは、単に異なる言語の間の類似性や差異に言及するのみならず、翻訳という概念を介在させて、母語で正確に表現できない場合は外国語でも困難であろうという自身の見解を開示している。加えて、

そこでは、異なる言語間における文法の類似性の有無が少なからず関与するものであると指摘しつつも、一方で、全く体系の異なる言語でも同様の概念で説明する場合があることにまで言い及んでいる。

このように、学習者Bは自身の研究活動上の言語使用経験から、母語、英語、日本語の3言語の運用に関して、単純な二分法ではなく、巨視的な視点から厳密に論じている。このことは、狭義のライティング活動の話題にとどまらず、研究者の卵としての批判的な目を有し、上記のように言語化できているものと高く評価できる。

さらに、学習者Cは、学期当初に作成した文章をチェックした結果、文末表現やアカデミックな表現の選択の面以外に、「全体としてはよい文章だった」と評価しつつ、読み手への配慮という点で改善の余地があったと述べた。作成当時を思い出して、次のように語った。なお、作成した文章のテーマは環境問題に関わるものであった。

> 流れとしては、読む人を、ジェネラルな情報が必要だなと想定して書くんだったらあれでよかったのかな、と思ってて、ただ、付け加えるとしたら、技術的なことをもう少し入れた方が、相手に知識を与えるとか、相手に対してもっと説得力を持たせることができたのかなと思いますけど。そもそも想定してたのが、理系の言葉をあんまり理解していないというか知らない人、「空気」とか「オゾン」とかは知っている、中学3年、高校1年レベルを想定して書いたんですけど、まあ、新聞もそのように書けって言われているんですけど。

学習者Cは、学習者AともBとも異なり、当該文章を書いた自分自身を内省した結果、文章作成時点での読み手の想定について考慮したという、執筆の背景的な内容を、かなり具体的に説明し、改善点を示しつつ自己評価を行っている。つまり、執筆に際し、読み手を定め、それに合わせて文章表現等を選択するという熟慮がなされていたことが指摘できる。

Cは、現在、大学院では学部時代の専門と異なる分野を専攻しており、「異分野体験」を持つ大学院生である。学部卒業後には、学部時代とはやや異なる分野の研究室において2年間ラボマネージメントに携わり、「言葉がknowledgeベースで違う」(Cの表現)という実体験が既にあった。その経験から、相手の立場に立って表現を考えるべきであるとの信念を持つようになったと語った。すなわち、学習者Cは、学部卒業から大学院入学までの間に、専門分野によって異なる表現体系を有する場合があることを具体的に知り、異なる研究者間での科学的なコミュニケーションには、相手が理解できる表現を用いる必要性を体感してきたと言える。その経験に基づき、Cの文章作成時の構想や執筆準備の段階において、読み手の想定と読み手に合わせた文章表現の選択について意識化されていることが明らかであった。

6-2-2　授業での協働的なタスクへのコメント

まず、文章を分析するタスクに入る前の自身の言語学習に関するふり返りを行う「内省」タスクについて、学習者Aは次のように語り、理解を示した。

> アカデミック・ライティングと言えば、難しいと思いますが、内省のタスクで、アカデミック・ライティングは新しいことではなく、自分は書いたことがあると思い出しました。自分の経験から始まるので、難しそうなことは、できそうなことになりました。

内省タスクは、外国語学習経験から、学習方法をふり返り、さらには、文章観や文章学習観とも言える自身の持つ基準やビリーフについて意識化し、クラスメート等の他者とそれらに関する意見交換を行う協働的学習機会を設けたものである。この教材では、そういった意識化を進めた後で、ライティングの学習に適した方法を模索しながら、種々の文章の分析等のタスクに進むという構成をとっている。

また、3名の学習者から、それぞれ文章を比較・分析・評価するタスクへの高い評価が得られた。例えば、Aは、アンケートに次のようなコメントを寄せている。

悪い文章と良い文章を読むことで、読み手の気持ちがわかるようになった。（中略）また、二つの文章を読む際に、一つずつの比較のポイントを詳しく分析し、論理的な分析能力が向上した。

学習者Aはこれまで自分の文章を分析したことはないものの、書いたものがあまりよくないとわかっていたと述べた。しかし、具体的な問題点が把握できず、それができなければ、解決法もわからないと説明していた。そのため、上記のように文章を徹底的に比較して分析することによって、問題点が具体的に明らかになったことを評価していると言える。

同様に学習者Bも、次のように述べている。

比較する活動は勉強になりました。現在の段階と望ましい段階の評価ができる練習でした。現在の最初に説明してもらった例文は現在の私の状態で、できるだけ、2つ目の例文はこれから作れるようになりたい例文だと思います。いい文章はどのようなものかイメージできる。

学習者Bは、このように、タスク活動の中で、問題を含む文章例の方を現在の自分の状態だと比喩的に述べ、問題が改善、あるいは解消された文章例の方を、自分がこれから目指すものであると位置づけている。つまり、このようなモニタリングによる自身の能力の位置付けによって、自分がステップアップするための言語運用上の処置や対応が、その理由や背景とともに具体的な文章表現上で理解でき、かつ、そのような具体的な文章比較による可視化の有用性が認識できたという、タスクの長所を認めているものと推測される。

さらに、学習者Cは、クラスメートと協働的に行うタスク形式について次のように、他者のコメントに関心を持って注目していた様子を語った。

自分の気づかなかったところを言ってくれるとおもしろいなと思いました。他の人が抜けているところもあるけれども、よく読めているなと思いました。深読みできている。（中略）全体の構成、言わんとしている意図、表現など、俯瞰的に見られているなと思いました。

このように、学習者が自分一人では気づかなかった読み方や考え方を「俯瞰的」と表現し、Cは協働的活動であるからこそ新たな視点が得られたという、活動の意義を認めていると言える。

6-2-3　現在の日本語能力に対する自己評価

ここでは、表3に示した自己評価欄の5点のうち、3名の学習者がそれぞれ特に強調して回答あるいはコメントした部分について、以下まとめる。

学習者Aは、(1)の話し言葉と書き言葉の差異等について、「なるべく漢語を使い、名詞化をするように心がける」と述べている。これは、アカデミックで簡潔な文章語のスタイルを意識したものと言える。授業中にも筆者が言及した名詞化は、例えば、「～はどうしてか」ではなく「～の理由」と簡潔にまとめられる例等による方策を示している。

また、Aは、(2)の文章全体や段落内の構成については、「全体構成と各段落の文章の均衡をきちんと考えるようになった」と回答している。

同様に、Cも(1)の文章の目的によるジャンルの違いへの意識について、「読み手を意識した文章の構成、言葉選びができるようになった」、さらに(2)の文章構成についても、「全体の構成にふさわしい文章の順番を意識するようになった」と各々回答している。

このように以前にはそれほど意識に上らなかった注意点が意識化され、それらが言語化されるようになっている。

(3)の「引用」については、学習者Bは、母語による研究活動でのトレーニングですでに理解が深まっているためか、「世界的に共通している研究のやり方のものですから、それで問題がないと思います」と述べていた。学習者Bは、実際のレポートにおいても、具体的な引用形式を学んだ他、引用自体の重要性は認識できており、本人も問題を感じていないという自己評価を示した。

これに対して、学習者Aは、「引用の目的がもっと

分かってきた。引用先の著者に対する敬意を表すことの他に、自分のレポートに有利な材料を示す。レポートの内容の信頼度が高くなる」と具体的にアンケートに回答している。これらを復習的に再度アンケートに言語化して記述することにより、意識化された学習事項が一層効果的に定着されるものと考えられる。

さらに、(4)の「文章を推敲する能力」について、学習者Bは次のように述べている。

> 高くなりました。書ければ書けるほど、もっと推敲ができるようになります。また、日本語の資料を読むことによって日本語の自然な書き方を自分の書き方と比較することもできます。その点について、前の2つ目の例文のことなんですけど、このように1つ目の例文を見て、私の書き方ですよね、と気が付いて、もっとレベルの高い書き方に進めるようになる。正しい書き方を見て、できるようになるというわけではなく、現在から次の段階へ進める方法があれば、すごく勉強になると思います。書こうとしても、現在の段階に気付いていなければ、進んでいるかどうか気が付かないから、進んでいないことになる。

学習者Bは、このように、ライティング能力の向上のための重要な点を指摘している。つまり、学習者の背景や能力は異なり、学ぶべき多種多様なことがあるにもかかわらず、唯一のモデルを提示されて一様に模倣することは得策ではないということである。Bの学習者としての優れた点の一つは、先述したように、自分が現在置かれた習得の段階を意識し、その段階で不足点や不完全な部分を分析し、把握できた上で、それらを解決するべく学習を継続して能力を向上させていく方法に気付いていることである。

(5)の「表現や文型」については3名とも運用能力が向上したと評価していたが、さらに学習者Cは、「レポートや論文の表現を多く学ぶことができたが、自分が論文を書いている時に、正しく使えるようになるかが今後の課題である」とのコメントを寄せている。ここに指摘された課題は、かなり熟達した書き手でなければ、自信を持つことが難しいレベルであると言える。学習者Cは、単に上達を評価するだけでなく、冷静に、自分が今後乗り越えるべき課題を意識していることが明らかであった。

6-2-4　今後の日本語学習方法の計画や希望等

学習者Aは、「できるだけ多く書く練習をしたい」と回答し、多くの文章を読みながら、「頻度が高い言葉と文法をメモしておいて、いつもそれをもとに復習したい」と述べている。また、「きちんと構成がある長いレポートを書く際には、常に要点だけは考えられるが、詳細な説明ができないので、文章の量が少ない」と自己分析した。そのことをふまえ、「これから書く練習をする方法は、論文を読んだ後、内容要約や引用をすることである。また、その論文の筆者が述べたことに対し、反対するか、賛成するか、たくさん理由を挙げて、文章を書く練習をしようと思う」との回答を提示していた。

このように、学習者Aは実際に自分自身の専門分野における文献を十分に読み込み、かつその文献の文章に出現する表現や文法に注意を払いつつ、一方で、内容の要約や引用の練習をして執筆の経験を積むことでライティング能力の向上を目指している。正確にかつ批判的に文献が読み込めなければ、その内容の要約も引用も事実上不可能である。不正確な要約や引用であれば、自分自身の論文に情報を取り込んだ内容の論理展開においては、看過できない問題を残すことにもなり、適切な論文執筆とはほど遠いレベルのものになるであろう。学習者Aの「トレーニング」を継続したいとも換言できる学習への希望は、授業担当者から見て、学習への種々の意識化が進み、自律的にライティング活動を行っていける期待を抱かせるものである。

次に、学習者Bは、授業外においても、自分自身の研究活動の過程で論文を読んで「アカデミックな言葉を身に付けた」と回答し、「あとはライティングの授業で使えば使うほど覚えるようになりました」とも指摘している。さらに、「今はどこでも（授業の受講・研究活動）日本語で参加できます」とも述べ、さらに、研究成果を発信するために、英語と日本語の両方の言

語を重視する姿勢も見せた。母語の異なる多くの研究者とともに、理工系の共同研究を遂行すること、および、翌年度から、全て日本語で行われる修士課程の授業に出席することへの期待についても、それぞれ言及された。日本語と英語、および母語による複数言語による情報獲得は、研究活動にとって非常に有利に働くと思われる。

さらに学習者Cは、ビジネスにも関心を持つようになっており、「いつかは書かなければならない。あなたが当事者であると考えたら、それはいいと思います」と述べ、自身の専門分野の成果や知見が、社会貢献につながることを意識している。同時に、日本語によるコミュニケーションについても、「コミュニケーションを取りたいということを説明したとか、心からつながりたいと言うと、日本語による取り組み方も上達するのではないか。心構え、精神論は重要で、ポジティブでありたいと思っています」とも述べた。ここにも、狭義のライティング活動にはとどまらない、その活動を取り巻くコミュニケーションという背景を意識した巨視的な視点の存在が指摘できる。つまり、言語項目の模倣や暗記等の狭い捉え方ではなく、まず、心構えが重要という精神論の存在への言及があり、それは、本授業で意図した「内省」タスクによる意識化の重要さに通じるものであると言える。

なお、学習者Cからは、学期最後にも「内省タスク」を授業活動として時間を設けて実施すればよいのではないかとの有用な提案を受けた。そういったタスクは、アンケートへの記述に加えて、他者であるクラスメートとさらに協働的に、学習の成果を確認し、共有できる機会にもなる。今後のカリキュラムの改善に資する提案であると考える。

7　総合的考察

第7章では、前章までの分析と考察をまとめ、学習者3名のライティング能力の向上の観点から、教材と授業に対する評価について総合的に考察する。

まず、学習者Aは、引用の重要性に改めて気づき、また過去の自身の文章を読んで論理構成や文章量等の問題点を詳細に分析し、さらには来日前の修士課程での経験を想起して内省タスクを評価していた。Aは、この授業でのタスク活動を通じて、文章の分析能力が向上し、巨視的な視点が獲得できたと言える。

学習者Bは、文章を比較しながら分析する活動を評価し、文章の問題点が明らかにならなければ文章の改訂は行えないと述べていた。同時に、自身のライティング能力がどの段階にあるかに気付き、自分のレベルに気付かなければ次のレベルへの向上は困難であるとの結論に達した。このような結論は、本授業で用いた教材のタスク方法が評価されたこと、および、学習方法や自身のレベルのモニタリングの重要性への認識を深めることに有用であったことを示すものと考えられる。つまり、このタスクと授業が、学習者Bのライティング学習の目標の明確化や具体化に貢献できたと言える。

さらに、学習者Cは、もともと読み手を意識して文章を作成する習慣があり、クラス内でもかなり高度な日本語能力を有する学習者であったが、それだけにとどまらず、クラスメートとの協働的活動であるタスクにおいて、他者が深く読み込んでいる点や自身が気づかなかった点を指摘し、他者という人的リソース（資源）を自身の思考の深化に有機的に活用していた。さらには、他者とのコミュニケーションに際して、心構えや精神論も重要であるとの認識を提示した。

以上の3名のインタビュー調査の結果分析から、教材が提示した内省タスクから文章の分析活動までの一連の活動は、単に文章の分析力向上につながるだけではないことがわかる。つまり、基本的に学習への意識の変容を見てとることが可能である。特に学習者Cは、その言葉に顕著に見られるように、学習へのビリーフが変容していると言える。このようなビリーフの変容によって、今後、学習者が研究活動や、研究活動に伴う日本語学習において、より巨視的な視点を持ち、複眼的な思考を行って、他者との協働的な活動の意義を認めながら、ライティング活動に取り組んでいくことが期待できるものであると結論できる。

8　おわりに

本稿では調査協力者が少数であり、授業と教材は、包括的に評価できたとは言えないが、一定の有用性が認められたものと考えられる。

本稿で扱った教材は半期15週では全てを扱えないため、学習者の論文スキーマの程度および授業時間数に応じてカリキュラムを柔軟に検討していく必要がある。また、今回特に取り上げてはいないが、別冊の解説書についても、有効性を検証する必要がある。

今後、さらに多様な背景の学習者に対しても各種タスクの困難点や改善すべき点がないかを検証しつつ、実践と評価を行い、教育に有意義な還元が行える研究を目指したい。

謝　辞

本稿を完成するまでのドラフトの段階で、教材の共著者である、東京工業大学名誉教授の仁科喜久子先生と、日本赤十字九州国際看護大学教授の因京子先生から貴重なコメントをいただきました。ここに感謝の意を表します。完成版の不備はひとえに筆者に帰するものです。

付　記

本研究は、平成25年度科学研究費補助金基盤研究(B)（「学習者の多様な背景に着目した論文スキーマ形成型日本語文章作成支援に関する実証研究」課題番号25580113，研究代表者：村岡貴子）の助成を受けて行った。

注

1. テーマは「交通の問題」「教育の問題」「環境の問題」「異文化間コミュニケーションの問題」の中から選び、自国で起こっている問題について、問題の説明、原因や背景の分析、およびその問題への対策について論じるものである。これは、従来から選択コースの中級と上級のライティング授業をともに担当してきた国際教育交流センター非常勤講師の米田由喜代氏が当初考案したものに新たに1つテーマを加えたものである。なお、テーマ選択の際には、自身の専門分野以外のものを選ぶように条件を付け、専門分野の特殊なトピックに偏らないよう自由に記述させることを意図した。また、執筆時に辞書の使用は認めた。

参考文献

因京子・村岡貴子・仁科喜久子（2008）「日本語テキスト分析タスクの論文構造スキーマ形成誘導効果」『専門日本語教育研究』第10号，pp.29-34

西口光一（2012）「CEFRの構造と記述文とOUSカリキュラム」『大阪大学国際教育交流センター研究論集　多文化社会と留学生交流』第16号，pp.63-72

村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2009）「専門文章作成支援方法の開発に向けて ―スキーマ形成を中心に―」『専門日本語教育研究』第11号，pp.23-30

村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2010）「専門日本語ライティング能力の獲得を目指す日本語テキスト分析タスク活動を通じたスキーマ形成」『世界日本語教育大会発表論文集』論文番号1325，pp.0-9，国立政治大学，台北，2010年7月

村岡貴子（2011）「『論文スキーマ』の観点から見た日本語学習者の文章に見られる構成と論理展開に関する問題分析 ―専門日本語ライティング教育の観点から―」『銘傳日本語教育』第14期，pp.1-22

村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2012）「論文スキーマ形成から見た専門日本語ライティング能力獲得過程 ―学習者の文章と推敲作業の分析およびインタビュー調査から―」2012年日本語教育国際研究大会（ICJLE）名古屋，C124，p.209，名古屋大学，2012年8月

村岡貴子（2012）「研究留学生のための専門日本語ライティング教育の可能性」仁科喜久子監修『日本語学習支援の構築 ―言語教育・コーパス・システム開発―』凡人社，pp.77-90

村岡貴子（2013）「研究留学生を対象とした日本語アカデミック・ライティングの教育実践―論文スキーマ形成を通して―」『平成21年度～平成24年度科学研究費補助金基盤B課題番号21320093　留学

生大量受け入れ時代に向けた大学における新たな日本語教育スタンダードの構築』（研究代表者：西口光一）pp.55-64
村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2013a）『論文作成のための文章力向上プログラムーアカデミック・ライティングの核心をつかむー』大阪大学出版会
村岡貴子・因京子・仁科喜久子（2013b）「研究コミュニティ新規参入者のための日本語文章力向上を目指す教材の開発と評価」『第15回専門日本語教育学会研究討論会会誌』pp.20-21
Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment.* Cambridge University Press. 吉島茂他訳・編（2004）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社

資料1：［村岡他（2013a）p.22］

2.1 「書く」活動と文章の種類

タスク① 内省

現在置かれている、学習・研究活動の環境における「書く」活動について、次の［　　］にある例を参照しながら、自分自身がどのような文章を書く可能性があるか、考えてください。次に、それらの文章の重要度を考えて、以下の4種類の記号を使って、重要度を分類してください。

「非常に重要である」は◎、「多分重要である」は○、「わからない」は△、「重要ではない」は×

他にも書く可能性のある文章があれば、文章の種類の空欄に書いてください。

レポート、論文（修士論文、博士論文など）、授業や報告会でのレジュメ、実験レポート、プレゼンテーション用ソフトを用いた視覚資料、調査のためのフィールドノート、Eメールでの事務連絡、etc.

表2-1 学習・研究活動で必要な「書く」文章の一覧

文章の種類	レポート	論文	レジュメ				
重要度							

資料2：［村岡他（2013a）p.35］

3.3 学習・研究活動のふり返り

タスク③ 内省

第2章で確認した「書く」活動を中心に、自分自身の学習・研究活動をふり返り、次の（1）から（5）に答えてください。あとで、友人と意見交換をしてください。

（1）学習・研究活動を行う際に、「約束」や「締切り」への注意と努力を怠（おこた）っていませんか。以下の（a）、（b）について答えてください。

(a)「締切り」に遅れたこと、あるいは遅れそうになったことはあるか。どう対処したか。相手に許してもらえたか。その理由は。

(b) 多くの作業を短期間に行う必要がある場合、優先順位を決めているか。その際、最も重視することは何か。スケジュールが守れなくなる「いつもの原因」は何か。

資料3：［村岡他（2013a）p.78］

6.2 タイトルとアウトライン

タスク② 分析

（1）下にレポートのタイトルの案が示されています。これらのタイトルは適切と言えるかどうかを判断し、表6-1に、適切なものは○、そうではないものには×、判断できないものに△をつけてください。また、その判断の根拠も表6-1に書いてください。それについて、友人と意見を交換してください。

【タイトル案】

（ア）若者ことばをめぐる一考察

（イ）災害と事故から見た原発

（ウ）欧米諸国の女性の地位向上のための法律の影響と日本の実態

（エ）ナノテクノロジーと人々の生活

（オ）日本と中国と韓国の大卒者の就職事情の比較から

表 6-1　五つのタイトル案の分析

タイトル記号	タイトル	適切か不適切か	判断の根拠
(ア)	若者ことばをめぐる一考察		
(イ)	災害と事故から見た原発		
(ウ)	欧米諸国の女性の地位向上のための法律の影響と日本の実態		
(エ)	ナノテクノロジーと人々の生活		
(オ)	日本と中国と韓国の大卒者の就職事情の比較から		

資料４：[村岡他（2013a）p.89]

6.4　結論までの一貫性

タスク⑥　分析

（1）素材文 5-a は、高齢化問題について書かれたレポートの最終段落で、結論が述べられています。まず、各文が下の［　　］の（a）から（f）のどの構成要素に該当するかを考えて、表 6-4 の「構成要素」のところに適切な記号を入れてください。それを見て、論理展開の適否を判断し、表 6-4 を完成させてください。同じ記号を 2 回使ってもいいです。一部の文については、すでに分析が示されています。なお、分析の利便のために、各文には①②・・・・・・と、もともとの論文には含まれていない番号がつけられています。

素材文 5-a：レポート（最終段落）
日本の少子高齢化に伴う問題と対策
①以上に述べてきたように、少子高齢化は非常に大きな問題である。②少子高齢化が進むとともに、高齢者のための医療保険制度だけでなく、公的な年金の支払い、および年金給付額は深刻な問題になっていると言える。③さらに、日本の総人口に占める高齢者の割合が高いことから、日本は人的資源不足の問題に直面している。④このような労働力不足の問題を解決するためには、外国からの労働者の受入れ整備を早急に行う必要がある。⑤しかし、高齢者の高い割合は、日本の医療的および社会的環境と生活水準の高さの標で示もある。

(a) 前段落のまとめ	(b) 情報の追加
(c) 問題解決への提案	(d) 結論に対する反論
(e) 結論に対する補足	(f) 別の解釈の提示

表6-4　素材文 5-a の論理展開に関する分析

番号	構成要素	論理展開の適否
①	(a)	
②		
③		
④	(c)	
⑤		

[村岡他（2013a）p.91]

（3）素材文 5-b と素材文 5-c は、素材文 5-a を書き換えたものです。素材文 5-a と比べて、結論までの道筋は、どちらが適切ですか。その判断理由も述べてください。友人とも意見交換をしてください。

素材文 5-b：レポート（最終段落）
日本の少子化に伴う問題と対策
①以上に述べてきたように、少子高齢化は非常に大きな問題である。②少子高齢化が進むとともに、高齢者のための医療保険制度だけでなく、公的な年金の支払い、および年金給付額は深刻な問題になっていると言える。③さらに、日本の総人口に占める高齢者の割合が高いことから、日本は人的資源不足の問題に直面している。④このような労働力不足を解決するため、外国からの労働者の受け入れ整備を早急に行う必要がある。⑤ただし、高齢者の高い割合は日本の医療的および社会的環境と生活水準の高さの標示でもある。

素材文 5-c：レポート（最終段落）
日本の少子化に伴う問題と対策
①以上に述べてきたように、少子高齢化は非常に大きな問題である。②少子高齢化が進むとともに、高齢者のための医療保険制度だけでなく、公的な年金の支払い、および年金給付額は深刻な問題になっていると言える。③さらに、日本の総人口に占める高齢者の割合が高いことから、日本は人的資源不足の問題に直面している。④高齢者の高い割合は日本の医療的および社会的環境と生活水準の高さの標示でもあると考えられるものの、以上に述べた労働力不足は深刻な問題であり、外国からの労働者の受け入れ整備を早急に行う必要がある。